

# カナダの連邦主義とケベック — その歴史的背景

ヨーク大学歴史学部教授 ラムジー・クック



カナダの連邦制度は、地域の多様性と言語的二重性という、カナダの最も基本的な特徴を反映している。地域の多様性は、それぞれの地域の経済的、社会的、歴史的、文化的特性に起因する。

中でも、州住民のおよそ八割が昔も今も文化的、言語的に特異なケベックは、とりわけ異色だ。かつてはフランス語とカトリック、そしてかなり農村的性格を特徴としていたケベックは、世俗化し、都市化した。その文化的アイデンティティを守る決意はいささかも失っていない。

## カナダ統一と地域的帰属意識

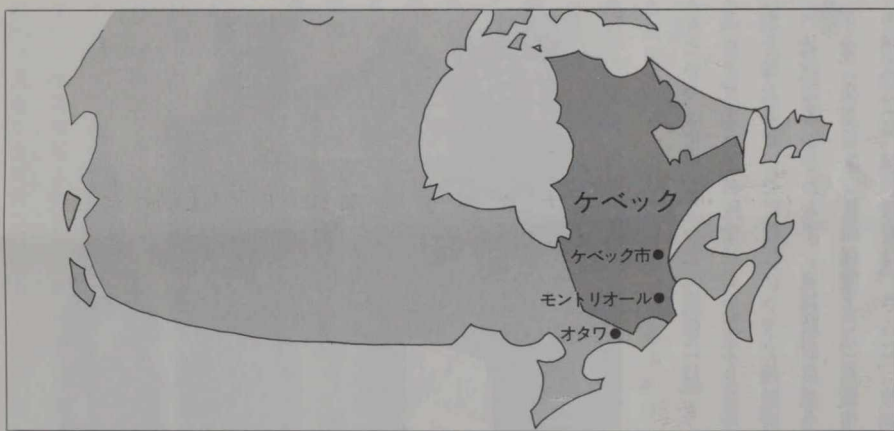
カナダの各地域、各州は、これまで大きくいって二つの目標を達成しようと願ってきた。それは現在も変わらない。ひとつはそれぞれの地域の歴史的アイデンティティであり、もうひとつの目標は統一国家の発展に向けて努力することによって、連合体が受ける経済的、政治的、国際的恩恵に与かる、ということである。地域のアイデンティティを守りたいという願望と、連合体としての統一の必要性との間に生まれた緊張こそ、カナダのこれまでの政治経験の本質であった。その緊張は、今、ほとんどあらゆる

世代のカナダ国民に新たな挑戦を突きつけている。

それぞれの地域の特異性を堅持したいという願望において、ケベックはど一貫してこの目標の追求に執着してきたところはない。連邦結成当時から、フランス語系カナダ人の大半はケベック州に住んできた。他の州に住むフランス系カナダ人は、ケベックと隣接するニュー・ブランズウィック、オンタリオ両州を中心に、全体のわずか二〇パーセントぐらゐに過ぎない。つまり、フランス系カナダ人にとって、彼らが十七世紀にセント・ローレンス川沿いに定住して以来、ケベックは歴史的故郷なのだ。一七六三年、当時フランス植民地だったケベックは、「七年戦争」の終結に当って英国に割譲された。以後一世紀にわたり、フランス系カナダ人は数も増え、また独自の社会的、経済的、宗教的諸制度、あるいは自らの政治的指導力を発展させた。また、州人口のおよそ二〇パーセントを占める少数派の英語系住民は、州の経済的發展に中心的役割を果たした。

一八六〇年代に入って、カナダにおける英語系およびフランス語系の指導者たちは、英帝国の当局者と同じく、

国防や経済的理由から英領北アメリカ植民地をすべて統合する必要性を痛感した。統合に際してまず認めるべき事実のひとつは、文化的二重性であった。「英領北アメリカ条例」に納められた新憲法は、このことを二つの基本的な形で認識している。第一に、少数派のフランス系カナダ人にとって受け入れられるのは連邦制度だけ、ということである。これにより、新しく生まれた各州政府に対し、いろいろな権限に加えて、文化的特異性を保存する上で必要と認められることがらに關する権限が付与された。教育とか、当時



は比較的に限られた社会的サービスを行っていた宗教機関や慈善施設などに関するものもろものがらについての権限などがそれである。ほかの州とは対照的に、ケベックは独自の民法制度を堅持し、またフランス語と英語は同州の政府と法廷において同等の地位を与えられた。主に英語系の少数派住民を対象としたプロテスタント系学校も、フランス語系住民向けのカトリック系学校と並んで認知された。要するに、フランス語系のケベック住民は、自らが過半数を占め、したがって独自の文化を守ることのできる地方国家を与えられたのである。中央政府はまた、英語と並んで、フランス語を連邦議会やその記録、および連邦政府によって設立された法廷における公用語とした。ケベック州と連邦機関に限られてはいたが、一八六七年、フランス語が初めて憲法上の地位を保証されたのである。

## 仏系住民の無力感を高めた事件

新しく連邦制度を創設した人たちは、英領北アメリカ条例によって英語系、フランス語系カナダ人の間の文化的葛藤は終わりを告げるだろうと信じていたようであるが、彼らの樂觀には根拠のないことが実証された。一八六七年から第一次世界大戦の終結までに、フランス系カナダ人の不安感を増大し、彼らの目を一段と自分たちの文化の守護者としてのケベック州政府に向けさせる事件がいくつか起こった。

まず、英語系諸州におけるフランス語教育の制限である。一八七〇年のマニトバ新州の憲法には、フランス語やカトリック系学校のことも定めてあった